

UU ユー・ユー・ナウ now

OB. OG. INTERVIEW

地球をもちろむ「じゅ」描く

日本画家

松本 哲男

CONTENTS

- 1 OB. OG. INTERVIEW
- 4 特集 「里山科学センター」
- 6 地域貢献REPORT
- 8 Welcome to 授業
- 9 Welcome to 研究室&ゼミ
- 10 研究keyword / 私の学生時代
- 12 UU News /サークル紹介
- 14 学生アンケート 宇大生は今!
- 15 INFORMATION

地球をちねんじつ描く

日本画家で東北芸術工科大学名誉学長の松本哲男さんを、宇都宮市内の自宅アトリエに訪ねた。体育館を思わせる天井高の広いアトリエに踏み入ると、世界三大瀑布の一つ、南米・イグアスの滝を描いた幅6メートルに及ぶ迫力ある大パノラマが目飛び込んでくる。大地に坐り、五感で大自然を感じ、その感動を描くことを大切にしている松本さんの代表作だ。「僕は地球をまるごと描きたいんだ。まだまだ描ききっていない」と語る。

(取材/教育学研究科1年・藤島生、教育学部4年・鈴木文香、同3年・森真実)

コロンブスの卵

宇都宮大学を卒業し高校の美術教師として赴任した那須の地で、日本画を本格的に描き始めた。下宿先の目の前に広がる那須の山々がモチーフだった。

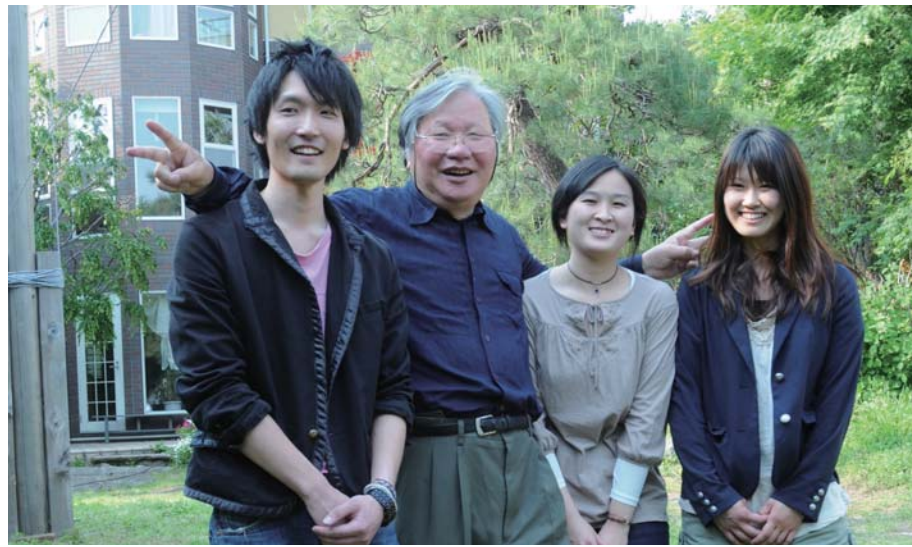
学校へ向う。純真な生徒たちとのふれあいは楽しかった。教師として過ごす8時間は、とことん生徒たちと向き合うと心に決めた。学校で自分の絵を描くことはなかった。下宿に帰ってからは毎日8時間、絵を描くことに没頭した。「この時間だけは自分に決まっていた。命がけ



プロフィール

松本 哲男【まつもと・てつお】

1943年、佐野市生まれ。68年、宇都宮大学教育学部美術科卒。県立那須高校に美術教師として赴任。69年、再興第54回院展《冬山》初入選。74年、再興第59回院展《山》日本美術院賞(大観賞)。83年、日本美術院同人推挙。89年、再興第74回院展《エローラ(カイル・サナータ寺院)》文部大臣賞。93年、再興第78回院展《グランド・キャニオン》内閣総理大臣賞受賞。05年、『松本哲男展 世界三大瀑布完成を記念して』(宇都宮美術館)開催。06年、東北芸術工科大学学長就任。11年、同学長退任。現在、同大学名誉学長



松本さんのアトリエで(左から藤島、松本さん、鈴木、森)



学生時代の松本さん(1967年頃)

そこから抜け出すまで頑張るしかない。その教えはずっと持ち続けていた。出世作『山』は、完成までに2年かかった。毎日山を眺めていたが、どうしても描けない。春霞が美しい山、夏の若々しい山、秋の紅葉した山、冬の雪山を地べたに坐ってずっと見ていた。すると、「絵が描ける」と感じる瞬間がある。「暗闇の中、ウイスキーを飲みながら山に向ってると、向こうから山が匂ってくる、見えてくる。山が語りかけてきた。」「山から逃げない。これは宇都宮大学で学んだ精神です。目の前の現実に向き合い、自分のものにするまで



制作の過程を学生たちに話す松本さん(アトリエにて)

の強い気持ちで絵に向った。絵の描き方を教えてくれる人は周りに誰もいない。ただ、目の前にある雄大な自然と対峙しながら、極細の面相筆で樹木の一本一本をこれでもかというほど緻密に粘り強く描き続けた。「山を歩いたときに感じた土や樹皮の手触り、匂いを思い浮かべながら毎晩、樹木を10本、なめるように描いた。1万本ほど描いた時に林の絵になっていた。

「絵を覚えてくれる人が誰もいないことを逆手にとつて、人がやらないことを苦しまぎれに見つけ出した描き方でしたが、『これこそ絵だよ』と認めてもらえた。まさにコロンブスの卵だった。絵とは難しいものだと思いついてたのかもしれない。そうじゃない。自分が思ったとおり、感動をそっくりそのまま描くことが大切なのです。」

食い下がり、絶対逃げない。モノを創るとはそういうこと。平川先生の教えです。」

もう一度、人生をつくる

この3月まで5年間、山形市にある東北芸術工科大学の学長を務めた。都会の大学に比べれば決して恵まれた環境にあるとは言えない。「何にもないことを逆手にとつた。あそこには抜群の自然がある。星が満天に輝く、こんな素晴らしい場所はない。自然の中に坐ろう。そして風のざわめきや体に感じたものを絵に描こう。大地に坐ると見えてくるもの、感じてくるものがある」。松本さん自身が那須の山中で、絵と真剣に向き合った生活のなかでつかみとつた創作スタイルを、山形の学生に諭すように伝えた。

学長退任後、一人の日本画家として、「もう一度、俺の人生をつくる

現実に向き合い、決して逃げない

「若し頃、絵の友達ではなく人生の友達に恵まれた」と松本さんは語る。生き方を教えてくれた友達(恩師)の一人が、宇都宮大学美術科の平川晋吾先生である。美術科の同期10人のうち男は松本さん一人だけ。「いい気になって斜に構えていたところがあった。平川先生からしこたま怒られながら育った」と述べた。「『おまえは何もわかっていない。空(くう)を見ている』と言われた。頭の中の世界ばかりで、現実を見ていない。」

「絵の前から離れちゃいかん」と教室に閉じ込められ、「ちくしょうと思いつながら」一週間絵の前に居続けたことがあった。夜遅くまで、ストーブの火が消えているのも忘れ2人で語り合った。「生きることに対して逃げちゃいけない。もがき苦しんで、



作品 第87回院展「ヴィクトリア・フォールズ」(ジンバブエ) 日本美術院同人 松本哲男 2002年(平成14年)

ていく。悔しいけど、いまでもどうやって描いたらいいかわからないことがある。そういうときは原点に戻るしかない」と語る。「地球そのものを描いて写生を終りにしようと思っている。まだ終わっていない。南極や北極があるし、南米やヨーロッパにもスケッチし足りないところがある。そこを全部自分の足で回る。ワクワクするよね。」

時代に合わせた里山の再生を考える



センター長 杉田昭栄【教授】

里山には美しい自然と人がそこら培ってきた知恵とがよく調和された世界があります。人は自然と共にしながら地域固有の文化を育んできました。その豊かな恵みを分け与えてくれる里山が、過疎化、高齢化の中で疲弊し、かつての姿が失われようとしています。

里山科学センターは、里山再生のため専任スタッフと19人の協力教員が連携し4つのミッションを柱に教育・研究・社会貢献活動を展開しています。里山を元気にする取り組みは、そう簡単なものではありません。ただ、自然の循環と再生は人間の時間感覚とは異なります。焦らず、「今日よりは明日が、少しでも前に進めば」と、大らかにゆったり構えることも必要だと感じています。

このたびの東日本大震災では、人と人の絆や思いやり、本当の幸せとは？そんなことを改めて考えさせられました。日本人のこころの故郷ともいえる里山を研究することは、こころを大事にするこれからの社会を考えるためのひとつの切り口になると考えます。「里山は決して特定の地域に住む人だけのものではなく、みんなのものである」、そんな視点で里山を見つめていくことが大切だと考えています。

宇都宮大学がこれまで里山をフィールドに取り組んできた教育・研究活動を一体的に束ね、さらなる進展を図るための基盤組織として09年、里山科学センターが設置されました。

- 里山科学センターのミッション
- 生態系・生物多様性と人間活動
 - 野生鳥獣管理技術者の人材養成
 - 里山コミュニティ・ビジネスの創出
 - 里山環境教育・地域貢献活動



写真上：援農/写真下：里山調査

里山野生鳥獣管理技術者養成プログラムとは

野生鳥獣の被害が一番多いのが中山間地域といわれる里山です。働き手が減少し農業を継続することが困難となり耕作放棄地が発生します。そのなかで野生鳥獣の被害がますます大きくなり地域の農業収入や営農意欲に打撃を与え、さらに耕作放棄地が増えるという負のスパイラル、悪循環が広がる構図にあります。農家個人、行政任せきりでは被害は決して防げません。地域ぐるみできちんと対応しなければならぬ問題になってきています。行政と地域の間で立つて、しかも地域に密着したかたちで指導助言する人材が絶対必要なのです。

里山野生鳥獣管理技術者養成プログラムは、本学と栃木県が連携して、地域全体の鳥獣被害防止のための施策、仕組みを考える「鳥獣管理プランナー」と、防除対策を現場で指導することができる「鳥獣管理専門員」を養成しています。09年度に始まり40人近い修了生が、知識と技術を持った野生鳥獣対策のスペシャリストとして地域に入り問題解決に取り組んでいます。



野生鳥獣管理技術者養成講座修了式



協力教員 小金澤正昭【教授】

- 協力教員
- 相田 吉昭【教授】
 - 平井 英明【教授】
 - 和田 義春【准教授】
 - 青山 真人【助教】
 - 金子 幸雄【教授】
 - 高橋 滋【講師】
 - 飯郷 雅之【准教授】
 - 田村 孝浩【准教授】
 - 原田 淳【准教授】
 - 福村 一成【准教授】
 - 大澤 和敏【准教授】
 - 茅野甚治郎【教授】
 - 加藤 弘二【准教授】
 - 山本 美穂【准教授】
 - 飯塚 和也【准教授】
 - 西尾 孝佳【准教授】
 - 佐々木和也【准教授】

里山科学センターは、大学の教育研究・地域貢献活動を通じて、世代を超えた、人と人の絆、人と自然の関係を科学的なアプローチによって再構築し、多様な主体が参画する社会を形成することで、人間の福利につながる地域の豊かさを求めます。 <http://ssrc.utsunomiya-u.ac.jp/>



副センター長 高橋俊守【特任准教授】

鳥獣管理士活躍の場が広がることを期待。農林業を営むうえで鳥獣対策は必ず越えなくてはならないハードルですが、被害対策を担う人材養成は全国的になされていませんでした。そこで野生鳥獣をきちんと管理し、農林業を安定した基盤で営めるよう下支えになる人材を養成するプログラムを立ち上げました。これまで見過ごされてきた特別の技術と知識を持った人材が地域の中で受け入れられ、行政や農家の人たちと連携して活躍の場が広がっていくことを期待しています。



専任 江成斗【特任助教】

被害対策の意識を高める取り組み。専門は二ホンザルの研究です。本県でもザルの被害が広がっていますが、ザルは他の鳥獣にくらべ行動力があり被害の種類も多く、解決の方向性をすぐに見出すことが難しいのです。被害が深刻化する背景には過疎化で耕作放棄地が増え、畑に人の姿が見られなくなったことがあります。単純な被害対策ではなく、地域ぐるみの対策が求められます。そのために地域の人たちの被害対策の意識を高める取り組みが大切になってきます。



専任 小寺祐二【特任助教】

地域の実情をよく理解する。専門はイノシシの研究です。鳥獣管理士養成プログラムの受講生には、鳥獣管理についての高い知識、技術をいかに現場である地域に伝えていけるかが、を理解してもらおうことが一番重要で、地域の実情を見ないまま、一方的に「こうしなさい」というかたちで地域に入って指導しても意味がありません。人間関係も含めて地域の実情、そこに住む人たちの心理状況に合わせて知識、技術を活かしていくことが必要です。



専任 野元加奈【特任技術員】

プログラム修了者と地域をつなぐ。鳥獣管理士養成プログラムの受講生は学生から70代まで年齢幅がありますし、職業も農業、会社員、行政職などさまざまです。それぞれの立場から鳥獣対策とは何かということを学んでいます。受講生や先生への技術的サポートが私の役割です。今年度は技術員として積極的に現場に足を運び、プログラム修了者が地域に入って活躍できるように、修了者と地域をつなげていく技術を高めていきたいと思います。



専任 横山恭子【特任助教】

地域資源を活用した商品開発。里山の保存、再生には自然資源を利用した商品を開発し、地域の企業と連携しながら経済を活性化していくことが大切です。全国各地で取り組まれています。商品開発の技術があっても販売力はどうも弱いという現状です。何をすれば地域にとって有効かを考えていきたい。開発した商品ブランド化し安定した収入が確保できるように、地域の人たちの里山を管理しようというインセンティブにつながると思います。



専任 大貫いさ子【特任研究員】

新たな地域の人材、資源を見出す。地域の課題を住民が主体となって、ビジネスを通して解決していくことがテーマです。今年度は地域の課題を整理するため、地域住民全員を対象に面接による聞き取り調査を実施します。日々の暮らしや農業のこと、地域のさまざまなことを聞きながら、人材を発掘していきたい。いままでも気付かなかったような意味での資源を見出し、いく作業を進める中で、集落の合意を得られるビジネスのシステムを、研究していきたいと思っています。



専任 平井雅世【特任技術員】

農家の知恵と大学の科学の知を融合。里山の恵みを生かした米づくりに取り組んでいます。地元農家の伝統的な技術・知恵と大学の科学の知を融合させたプロジェクトです。収穫した米を販売し消費者の反応から、この取り組みの価値を見出し、研究を進めています。また地域資源を活かした地域づくりを担う人材を養成するため、学生が地域の人たちと交わり、地域の課題にふれつつ、里山でいることを学んでもらえるようなシステムを考えていきたいと思います。



協力教員 大久保達弘【教授】

里山の現状を評価し上質の価値を見出す。主に那珂川流域を対象に生物多様性と生態系サービスが人間の福利に及ぼす影響を、農林水産業を通じて明らかにすることがテーマです。里山では、人が自然の恵みを受け取り、生物の多様性を持続的に利用しながら生活してきました。里山の現状をきちっと評価し、平地での農林水産業より上質の価値を見出し、それがコミュニティビジネスの研究にもつながっていく。それがコミュニティに結びついていくのではないかと考えています。



上：参加した留学生、民族衣装を披露した学生もいる
左：留学生が用意したクイズに取り組む小学生

宇都宮大学に留学している外国人留学生は、地域の皆さんのさまざまな協力により、地域貢献、国際交流活動として、栃木県内の国際交流団体等が開催する数々のイベントに積極的に参加し、他大学の留学生や地域の皆さんと交流活動を行っています。外国人留学生は、限られた留学期間の中で、日本での生活や日本文化から多くのことを学んでいます。

平成22年度は、県立高校2校、小学校3校から国際交流授業等に参加要請があり、留学生が参加しました。その中で、平成22年11月27日、12名の留学生等が、栃木県の北部にある矢板市立矢板小学校を訪問しました。この日、矢板小学校ではPTAはもちろん近隣住民を招いて学校祭を開催し、日頃の学習の成果などを発表しました。

午後からは、児童達が企画したゲームなどをクラスごとに開催するイベントが行われ、大変盛況でした。このイベントに国際交流のコーナーとして、宇都宮大学の外国人留学生に参加する機会がありました。

参加した外国人留学生のうち5名は、母国で教師をしており、教員研修留学生としてフィリピン、ペルー、コスタリカから来日しています。彼らは、日本の学校での教育だけでなく、PTAについても非常に関心を示しました。母国ではPTAのよう



留学生が用意したゲームを楽しむ小学生

な組織はないということです。中でも一番驚いていたのは、学校と保護者の関わり方でした。保護者や近隣住民が、学校の行事に参加することはない一方で、「帰国したらこのようない取り組みを試してみたい」と話していました。

留学生は、小学校の児童達に母国の紹介をするために、さまざまな準備をしていました。

まず、世界地図で母国の位置をクイズにしたり、パソコンを使って映像や音声で母国の特色などを紹介しました。民族衣装を着て、民芸品や母国の紙幣、コインを陳列し説明をしたりしました。児童や保護者からの質問にも真剣に答えていました。

また、母国の子どもの遊びを実演し、矢板小学校の児童も一緒に楽しみました。日本では今ではほとんど見られなくなったお手玉や、おはじき取りゲーム(のよななもの)などは日本人の児童にはかえって新鮮



即興で始めた「リフティング」

宇都宮大学では、今後も留学生と地域との交流を可能な限り結びつけるよう進めていきます。

引き続き地域の皆さんの温かいご支援とご理解をお願いしたいと思います。

に映ったかも知れません。フィリピンから来日している教員研修留学生の一人が、即興でスーパーのレジ袋を20センチメートル角程度に切り、財布から10円玉を取り出して切り取ったレジ袋に入れました。更にレジ袋の切れ端で「てるてる坊主」のように結び、サッカーのボールリフティングの要領で、足の内側で何度も繰り返しリフティングを始めました。これには男子児童達があっという間に集まって来て、目を丸くして次々にチャレンジしていました。フィリピンでは、布などに小石を入れて作るそうです。

保護者の皆さんからは、「児童の兄弟が進学している中学校や高校でも交流を企画したいが、大学では対応してもらえるのか」といった質問もありました。

1. 留学生センター地域交流支援事業
2. 震災ボランティア活動

学生中心の支援プロジェクト

震災ボランティア活動



宇都宮大学では、今年のGWの4月29日から5月1日の3日間にわたり、東日本大震災被災地学生ボランティア派遣を行いました。今回、活動の場としたのは宮城県石巻市です。ボランティア受け入れまで手がまわらない被災地自治体が多い中、早くから県外のボランティアを受け入れていた石巻市を頼りに派遣検討のための現地視察を行ったのが、4月16日、そしてその2週間後には現地へボランティアバスを運行することができました。

活動日前日の午後10時にバス2台で大学を出発し、現地ボランティアセンターが受け付けを開始する8時までは車内で休憩。活動ののち、夕方には石巻を出発し、その日の夜には大学に着き、次の組が出発という要領で3往復し、私他、塚本純学長特別補佐、生涯学習教育研究センター・廣瀬隆人教授が3日間、現地コーディネートを担当しました。新聞などでは「弾丸ボランティア」と称されましたが、被災地では大人数の宿泊場所や飲食の確保は難しく、一方でできるだけ多くの学生に参加してほしいということから、このような形となりました。バス運行費や、泥出し作業に必要な合羽、ゴム手袋、



震災ボランティア活動のミーティング

防じんマスク、長靴などの費用は、大学による地域貢献活動支援のために作られた「峰ヶ丘地域貢献ファンド」や、大学内で募った震災義援金から支出しました。合羽などは被災地での活動を希望する学生へ貸出するなど今後も有効に活用する予定です。

1日目は石巻好文館高校に行き、ようやく新学期がはじまった高校の体育館周りの泥出し、津波で使えなくなったマットの片付けなどを行いました。2日目は津波により建物が壊滅状態となつてしまつた湊幼稚園が住吉幼稚園の一部を借りて授業を再開するために、園内をすみずみまで清掃しました。3日目は廣済寺に行き、お墓の周りや通路に厚くたまつたままの泥の掻き出しを行いました。3日間とも50人前後という人数で行きながら、できたことの少なさに愕然とし、相当に長期の支援が必

要だということを感じました。今回の派遣は当初1日1台のバスで、定員は1日20人で3日間合計60人の予定でした。ところが、受け付けをはじめてみると、わずか3日で定員がいっぱいとなり、その後も希望者がどんどん増え、ついにバスを2台に増やして合計160人の学生が参加することとなりました。バスも装備も大学まかせの参加には学生を甘やかせ過ぎという苦言もあるかと思いましたが、経済的に自立していない学生でも、学業の合間に被災地に赴き、「今、しかできない活動にあたるのができたことは、学生にとって貴重な経験となるでしょう。」

その後、参加した学生による振り返りミーティングの中から、学生による被災地支援プロジェクトが立ち上がり、大学との協働で、さらに多くの活動を担う準備をしています。今後は、この派遣に参加した学生が中心となって、さらに大きな支援の波を大学内で作ってくださることを期待しています。

(教育学部教授 長谷川万由美)



石巻市にて撮影

ゼミ概要

フランス文化をテーマにした卒論制作を通して、ものの考え方、世界の見方、人間のとらえ方を訓練します。授業は通常、担当者が論文の進ちょく状況を報告し、それに対しゼミ生全員で自由にディスカッションします。その中で、卒論の内容を深めたり、プランを練り直すなどの作業をします。

ゼミで学ぶ文化、思想というものはイメージしやすいかたちで答えが出てくるようなものではありません。答えが一義的に出ないものは、いろいろな視点からアプローチしていきます。俗説を疑ったり、あえて非常識なことを考えてみたり、そういうプロセスを踏まないと全体の構図が見えてこないということが必ずあるはずなのです。



フランス文化論-卒業研究演習

田口ゼミ【国際学部】

ゼミ生からの一言

「なぜフランス?」「田口ゼミとは?」

・大学の交換留学制度を利用してオルレアン大学に留学し、フランス語や文化を学びました。その経験を踏まえフランス文化の学びを深めたいと思い、フランス文化論が専門の田口先生のもとで論文を書こうと思いました。

・最初はフランスへの単なる憧れでフランス語の授業を選びました。そのうち、もっと深くフランスについて学びたいと思うようになり、国際社会学科の学生ですが、先生の授業がおもしろく、国際文化学科の田口先生のゼミで学ぼうと思いました。(国際学部は学科間交流がある)
・田口先生の授業や卒論指導を受けたくて宇大に編入しました。国立大学でフランスについて学べるところを探していました。宇大の友人からも情報を得たり、自分でも調べて、しっかり学べると思ったのです。

・植民地政策によってアフリカでも話されている言語ということで興味を持ち、フランス語やフランス文化論を選びました。先生から教えられる学問そのものがおもしろく、元気で熱心に教えてくれる姿勢にもひかれました。

・先生は衝撃的なことを言われることが多いです。フランスはきれいなイメージがありますが、本当はそれだけじゃないと、意外なことを指摘するので引き込まれます。



- ・フランス以外にも知識が豊富な先生で、就職活動の相談なども親身になってサポートしてくれます。
- ・留学経験者が半数近くいます。私はカナダに留学しました。過去にも田口ゼミでカナダにおけるフランス語圏の論文を書いた学生がいます。

座談会出席学生：安達恵梨子、一ノ宮沙紀、小野 加織、菅原江梨子、高橋 暁代、福田 実世、三上 愛未、宮川 今日子



教員から

学生たちに伝えたいことが4つあります。1つ目は、わからないことを忘れない記憶力。日々わからないことがあっても適当にスルーしてしまいがちです。忘れるということも1つの能力ですが、学ぶということは逆で、「わからないな」と引っ掛かったことをどこまで忘れずにいられるかがポイントです。2つ目は、ありえないことを考える想像力。ありえないことが起きたとき、自分はどうするのだろうかを考えることが学問にも応用されると思います。3つ目は、ものごとの舞台裏を見抜く洞察力。表面だけでは成り立たないことがいくらかでもある。脚光を浴びることなく表舞台を支えている人がいます。4つ目は、自分自身の頭で考えること。「偉い人が言っているから、みんなが言っているから」ではなく、どれだけ自分がリスクを受けようとも、他の人の名前を引き合いに出さず自分の考えを言える勇気を持つこと。最終的にはものごとに対し正しいことを言えるかどうかではなく、自分の言うことに責任を持てるかどうかだと思います。 国際学部国際文化学科 准教授 田口 卓臣



映画・文学作品に見られる障がい者像

新入生セミナー【教育学部】



【池本喜代正教授】

教員から

本授業は、2週で1セットの構成になっています。最初の週に、障がい児者が描かれている映画を受講生全員で鑑賞し、次の週にその映画に関する討論を行います。映画1作品につき、2~3名の受講生がレポーターとなり、担当する映画の鑑賞後、受講生の感想なども参考にしてさまざまな文献にあたり、次の週までに、その映画に描かれている障がい者像、障がい者観などに関してレポートを作成するとともに、全体での討論のテーマを用意します。討論では、レポーターが最初にレポートに従って発表した後、討論のテーマを、設定理由やテーマに対するグループとしての見解などとともに、受講生に提示します。討論の進行もレポーターが責任を持って行います。鑑賞する映画は、「野生の少年」「奇跡の人」「レインマン」「8日目」「学校」「マイ・レフトフット」などです。

大学においては、受け身的に知識を与えられるのを待つのではなく、主体的に自ら問題意識を持って問いを發し、それに対する答えを自ら見出していくことが大切です。問うて学び続けることです。したがって、レポートの発表も、単に調べてきたことを報告して終わるのではなく、さまざまな見解について批判的に吟味し、グループで見出した答えを自分のことばで表現することが求められます。本授業を通して、受講生がこうした大学における学びのあり方について実感してくれることを期待しています。



教育学部特別支援教育講座 准教授 岡澤 慎一

授業概要

本授業は、教育学部特別支援教育専攻の1年次学生を主たる対象として、特別支援教育講座の教員4名(佐久間、池本、梅永、岡澤)で開講しているものです。

本授業では、障がい者が描かれている映画、文学等の作品を鑑賞し、参加者全員がさまざまな角度から意見を交換し合うことにより、障がいや障がい者問題に関する感性と知識を深めるきっかけとします。

また、レポート作成、発表、討論の一連の活動を体験することにより、大学における学習方法と学習態度の基礎を身につけることも目的としています。

学生から

この授業では、障がいをテーマにした映画を鑑賞した翌週、全員で討論を行います。作品ごとにグループ単位で決まっています。作品のあらすじや、主人公に見られる障がいの特徴をまとめ、全員で行う討論テーマの提起を含めたレポートを作成しました。討論会当日にはレポートのテーマを基に、教授の意見も混ぜ各々の意見を交わします。真剣な「障がい観」が見えるので、とても有意義で毎回考えが洗練されていく感じがします。

特別支援教育専攻1年 石塚 麻夏

私は第1回の「野生の少年」という作品の担当グループでした。全く教育を受けず野生で育った少年が主人公で、彼は教育によって社会参加ができるのかということが主題の作品です。グループの4人で集まって討論のテーマを練りました。その際、「このテーマでどんな意見が出るか」「話が膨らむか」「意義のある討論になるか」の点に注意しました。しかし実際の討論では思いもよらない意見が飛び出して、予想以上に深みのある討論になります。

特別支援教育専攻1年 薄井 英里



研究 Keyword

宇大発、世界初

宇都宮大学大学院工学研究科 教授 藤原 浩巳

私の研究分野

早いもので、前任のシンガポール国立大学高性能コンクリート研究所から宇都宮大学に来て、11年が経ちました。前任地から分かるように私の専門分野はコンクリート材料学であり、もう30年近く研究・開発に従事しています。よく人から、コンクリートって何を研究しているのかと怪訝な顔で尋ねられることがあります。材料的にはまだ数十年の歴史しかない新しい材料で、世界中の多くの研究者が、様々なフェーズでコンクリートの高性能化に向けて鋭意研究しております。

私は大学生の時にコンクリート研究室に入り、卒業後はシンガポール国立大学に移るまで17年間セメント会社のコンクリート研究部に所属して、コンクリートの研究を続けてきました。その間、多岐に渡る新しい性能を有するコンクリート開発を手がけてきました。また、その一方では固まる前のコンクリートの流動解析などの基礎研究にも力を入れておりました。シンガポール国立大学へは、巨大な海水淡水化プラントを構築するための新たな高性能コンクリ

PROFILE

東京工業大学工学部土木工学科卒業、同大学院理工学研究科土木工学専攻博士後期課程修了、工学博士
専門分野：建設材料学、鉄筋コンクリート工学
現在、宇都宮大学大学院工学研究科地球環境デザイン学専攻教授



大学院工学研究科 教授 藤原 浩巳

ホースで、従来のものの10倍程度の1キロメートル以上の距離を圧送することができると言われています。これにより、それまで不可能であった場所の施工が可能となりました。これらの他にも、道路の雑草の生育を止める「グラスロック工法」や地震に強い軽量コンクリートブロック「V-ロック」など様々な開発を行っています。これらの全てがまったく新しい性能を持ったものであり、世界初の製品と言えます。

新たな世界初を目指して

セメントは、その製造の際にはセメント1トン当たり二酸化炭素を0.8トンも排出し、実に日本の排出量全体の4%を占めています。この問題を解決するために、現在私たちの研究室ではまったくセメントを使わずに、産業廃棄物や土だけでコンクリートを製造する研究を進めています。この研究は国際的にも関心を集めており、今年、スペインで開かれる国際会議で当研究室の学生により研究成果が発表される予定です。

コンクリートカヌーの挑戦

研究室で開発された材料技術の粋を集めてコンクリートカヌーを製作し、土木学会主催のコンクリートカヌー大会に挑戦しております。この大会は全国から40チーム程度参加し、レースと技術力を競っています。



昨年度のコンクリートカヌー大会決勝レース

す。当研究室チームは参戦以来過去10年において優勝3回、準優勝2回、3位入賞2回と好成績を収めており、特にここ2年は連続して優勝しております。コンクリートとは思えない厚さ5ミリメートルの薄いボディで、4メートルのカヌーでありながら50キログラム以下の軽量性を有しております。これは比重1.5以下で、曲げ強度13メガパスカル以上という高性能な素材が可能としたもので、宇大ならではの技術です。今年度は宇大の3連覇を阻止するため(?)、大幅に大会ルールが変更されましたが、ものともせず3連覇すべく学生と作戦を練っています。

宇大に来て11年。その間、多くの学生が社会に巣立っていきました。その中でもかなりの学生が材料開発研究に従事するようになり、学会などで顔を合わせるようになりました。これからは、宇大発の有為な人材を社会に送り続けていきたいと思えます。

1トの開発のため招かれたもので、15カ国から来ているコンクリート研究者たち約50名を部下に、悪戦苦闘しながら開発を進めておりました。平成12年に宇都宮大学に来てからは、それまでの知識と経験を生かし、これまでに無い新たな性能を持ったセメント・コンクリート製品を開発し続けています。次に、それらのいくつかを紹介いたします。

宇大発のセメント・コンクリート製品

- ・PCグラウト「セラメントフロー」
「セラメントフロー」は従来のグラウト材にチクソトロピー性状というマヨネーズのような性状を付与したもので、低い圧力で気泡を残すことなく隅々まで充填できる、まったく新しいタイプのグラウトです。この開発には日本コンクリート学会の技術賞が授与されました。
- ・断面修復材「なおシタル」
劣化したコンクリート構造物の断面を補修する場合、劣化して欠損した部位にモルタルを吹き付ける工法が一般的に採用されています。しかし、従来の製品では1回に吹き付け



1km圧送の後に、球体に吹き付けるキロフケール

られる厚さは壁で2センチメートル程度、梁下では0.5センチメートル程度が限界で、それ以上吹き付けるとダレたり剥離してしまいます。「なおシタル」はチクソトロピー性状を付与されたもので、壁なら20センチメートル程度、梁下でも15センチメートル程度を一度に吹き付けることが可能であり、大幅に工事期間を短縮できるものです。

・法面吹付材「キロフケール」
山岳部で崩落の危険がある崖を安定化させるために、モルタルを吹付けることが一般的に行われています。しかし、このような工事はミキサやポンプを設置できる車両通行可能な平面を近くに確保する必要があります。しかし、多くの現場では近くにこのような場所が確保できず、そのため非常に困難な工事を強いられています。「キロフケール」は簡易なポンプと、扱いが容易なフレキシブル

ダンス、マージャン、酒、そしてコンクリート

私の学生時代

東京工業大学工学部第6類に入学した私は、入学式直後のオリエンテーション旅行で部屋が一緒だった友人に引っ張られてフォークダンス部に入部しました。新入部員勧誘の場で、パートナー校であった共立薬科大学（現、慶応大学薬学部）の女子学生に囲まれるや、いきなり酒を飲むはめになってしまい、北海道から出てきたばかりの純朴な私はメロメロにされてしまったことも、入部した一因であったことは否めませんが。

ただ、このフォークダンス部というものの、まったくの体育会の部活であり、非常にハードなトレーニングをさせられました。華麗に跳びはねて回り踊るダンスは、しっかりとした体力的裏付けが無くても、1年も経つと新入



大学3年時（中央が藤原、右端が妻）

部員の半分以上が辞めてしまったのですが、メキシカンダンスなどを専門に、4年間続けることができました。家内はこの時のダンス仲間なのですが、その時の写真を見ては別人だと言います（現在の6割くらいの体重でした）。もちろん、ダンスばかりではなく学業もしていたのですが、試験の前に一夜漬けする程度で、空いている時間、昼間はマージャン、夜は酒といった生活でした。現在、学生に勉強しろと言う度ごとに、後ろめたさを感じております。

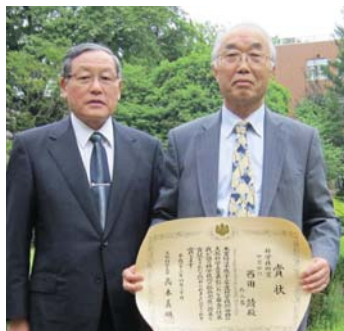
しかし、4年生になり研究室に所属してからは、一転して毎日コンクリートにまみれる生活となりました。実はコンクリート研究室を選んだ理由は、酒を飲む機会が多いということだったのですが（実際に多かった）あまりにしんどくて、就職は別の分野にしようと考えておりました。しかし、指導教官の先生に、半ば強引にコンクリート研究者の道を進まされ、現在に至っています。今でも、この先生とは学会などでお世話になっているのですが、いつか、何故私をコンクリート研究者にしようとしたのか、是非聞いてみたいと思います。

【藤原 浩巳】

My Campus Life

科学技術賞を受賞

西田靖名誉教授（元・理事、工学部長）が、平成23年度科学技術分野の文部科学大臣表彰において、科学技術賞（研究部門）を受賞した。受賞対象は「プラズマによる粒子加速の発見と超小型加速器の研究」で、プラズマや電磁波、放射線を発する機器である電子加速器の小型化を実現した。精密血管造影写真やガン治療等、放射線技術への応用が期待される。西田名誉教授は、現在、台湾の国立成功大学にて研究および教育活動を行っている。



日本植物病理学会賞を受賞

バイオサイエンス教育研究センター・センター長の夏秋知英農学部教授が平成23年度の日本植物病理学会賞を受賞した。長年研究してきた「弱毒ウイルスの分子作用機構に関する研究」が受賞対象で、遺伝子解析技術の利用による実用的なワクチン開発やワクチンの分子作用機構の解明など、植物病理学の基礎研究および応用研究によって、植物ウイルス病の防除に大きく貢献したことが高く評価された。



栃木県と包括連携協定を締結

「栃木県と国立大学法人宇都宮大学との包括連携協定」の締結式が5月26日本学で行われた。この協定は、本学と栃木県が、より密接かつ幅広い連携を図り、双方の資源を有効に活用し、地域の課題に適切に対応することにより、活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展に寄与することを目的としている。進村学長は「栃木県とはこれまで個別課題に関する協定を締結し連携事業を実施してきたが、この包括連携協定の締結により新たな価値の創出や新たな地域ニーズに対応した取り組みが期待できる」とあいさつした。



「グループラーニングルーム」新設

本学附属図書館は、学生のニーズに合った学習環境を提供するため、学生同士でグループ学習ができる場として本館2階レファレンスカウンター後方に「グループラーニングルーム」を新設した。会話可能な空間で、予約なしで自由に入出りできる。机や椅子は利用人数に合わせて自由に配置でき、ノートパソコン、プロジェクター、電子黒板が貸し出される。利用可能時間は月～金曜日の午前9時から午後5時まで。



剣道を通じて、人との出会いや自分を見つめ直す

私たち剣道部は経験者から初心者まで、さまざまな形で剣道に携わってきた人が、部全体の目標とともに、それぞれ目標を持って活動しています。昨年度は、関東甲信越大会で準優勝という結果を残しました。しかし一昨年の優勝に続く連覇は達成できませんでした。



また、剣道部では栃木県学生剣道大会という学生主催の大会を毎年行っております。この大会は、栃木県内の大学が参加する剣道大会で、栃木県の連盟の支援を受けながら、地域の方々のご支援により開催しています。『地域とともに成長する部』という言葉を大切に、行事等の活動に取り組んでいます。

現在は、インカレ出場を目標に、部員全体で試行錯誤しながら、自分たちに何が必要か考え、稽古をしております。個人個人の目標は違えど、全体で一つの目標を共有することで大きな力は生み出され、団結力に繋がり目標への一歩になると考えます。

剣道部は堅苦しいイメージが一般的ですが、剣道を通じて、人との出会いや自分を見つめ直すことは大学のうちだけの貴重な経験です。自分で考えて稽古する分、剣道の面白さを実感できるのが大学の剣道です。興味のある方は剣道場に足を運んでください。

剣道部主務 山田 航（教育学部3年）

「関東甲信越地区国立大学図書館協会

総会」開催

平成23年度関東甲信越地区国立大学図書館協会総会が4月20日、本学附属図書館で開催された。総会では、報告事項として東日本大震災に関する事柄が取り上げられ、実際に直接的被害を受けた図書館の被害状況や、被災を受けた他大学の学生を積極的に受け入れている事例の紹介、各大学・機関の対応状況等の報告が行われた。また、大学図書館コンソーシアム連合や、図書館職員の人事政策課題について意見交換が行われた。



“ガンバレ栃木、負けるなハウレンソウ”

東京電力福島第一原発事故による風評被害で一時出荷を制限されていた栃木県産ハウレンソウの出荷解除を受け、安全で安心な栃木の農産物に対する風評被害の軽減、さらには地産地消の重要性を実感してもらうため4月28日昼、本学生協食堂で『ガンバレ栃木、負けるなハウレンソウ』という企画が実施された。エプロン姿の進



村学長、石田副学長らが栃木県産のハウレンソウのお浸し350食を学生一人ひとりに手渡し、学生からも「ガンバレ栃木、負けるなハウレンソウ」の声が上がっていた。

フードコーディネーターSHIORI

「大学生の食と健康」をテーマに5月19日、NHK宇都宮放送局と合同で、TV・雑誌で活躍中のフードコーディネーターSHIORIさんによるトークショー「大学生のイマドキ！ごはん」を開催し、200人以上の学生が参加した。食生活と健康のアドバイスや健康に良い食材の説明があり、学生による調理実習では手順、盛り付けなどのアドバイスを受けた。試食をした学生たちは「大変おいしい」「自分も作ってみたい」などと楽しそうに話し、大盛況のトークショーだった。



日本蚕糸学会賞を受賞

バイオサイエンス教育研究センター・アイソトープ利用部門長である川崎秀樹農学部教授が平成23年度の日本蚕糸学会賞を受賞した。受賞対象となった研究課題は「翅原基（はねげんき）を利用したカイコ変態の遺伝子発現機構の解析に関する研究」。昆虫ホルモンの一種であるエクダイソンによって調節される複数の有用遺伝子をカイコから発見しただけでなく、翅が形成される分子メカニズムの一端を明らかにしたことが高く評価された。



宇都宮高等学校の授業がSPPに採択

独立行政法人科学技術振興機構が公募するSPP（サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト）に、本学農学部が参画する宇都宮高等学校の授業が採択されました。この授業は、宇都宮大学農学部と東京大学理学系研究科、海洋研究開発機構（JAMSTEC）高知コア研究所が連携して実施する地球科学に関する講座「深海底堆積物・コア試料の微化石から古環境を知ろう」で、宇都宮高校では地球科学分野の採択は初めてという。

本学と地域とを結ぶ架け橋



本学と地域とを結ぶ架け橋として峰キャンパスに「UUプラザ」が開設され、6月8日にオープン記念シンポジウムが行われた。UUプラザは、教育研究情報の公開や最新の研究成果を発信して地域連携・貢献・協働を目指す場であるとともに、学生・教職員・同窓会、OB・OG、地域の人たちが広くコミュニケーションを図る場として設置された。

進村学長は「UUプラザが、異分野の連携による共創作業によって地域特有の新たな価値をつくり出し、それによって栃木の地域イノベーションを展開できる場の一つになればと期待している」とあいさつした。「大学の社会連携活動と地域貢献」をテーマにしたシンポジウムは、NHK解説副委員長長の山崎登氏による「東日本大震災と地域の大学に求められること」と題した基調講演があり、その後、山崎氏、とちぎボランティアネットワーク代表の矢野正広氏、桜美林大学准教授の佐藤恵氏をパネリストとして迎え、本学国際学部の中村祐司教授をコーディネーターに活発なディスカッションが展開された。

アイデアカー・フェスタ2011

日程：8月28日(日)8:30受付開始
 会場：宇都宮大学工学部体育館
 参加費：エントリー1台につき500円
 問い合わせ・申し込み先：
 工学部附属ものづくり創成工学センター内
 ものづくりイベント実行委員会事務局
 TEL・FAX：028-689-7070
 E-Mail：ideacar@cc.utsunomiya-u.ac.jp



入場無料

一般市民の皆さまに大学院の授業を公開 国際化と日本

「21世紀の共生を考える」
 宇都宮大学国際学研究所は、一般市民の皆さまに大学院の授業を公開します。今回の講座は、国際的・学際的な視点から「共生」の問題を再検証する試みです。「自然における共生」「自然と人間の共生」「人間の社会の中の共生」「個としての人間の中での共生」という4つの枠組みの中で、各教員が独自の視点を提示します。どなたでも受講できますので、専門家の思索とはどのようなものなのかを、ぜひその目で確かめて来てください。

- 第1回 10月1日(土)14:00~16:00 場所：国際学部E棟1階1151教室
 内容：【生物学、生理学、心理学】生物学の共生から社会心理学的共生まで
 講義担当：中村真 教授
- 第2回 10月8日(土)14:00~16:00 場所：農学部2号館3105教室
 内容：【自然と文学】英文学と日本文学における自然との共生の問題
 講義担当：高際澄雄 教授
- 第3回 10月15日(土)14:00~16:00 場所：国際学部E棟1階1151教室
 内容：【環境と地域】自然保護の権力性とエコツーリズム
 講義担当：古村学 講師
- 第4回 10月22日(土)14:00~16:00 場所：国際学部E棟1階1151教室
 内容：【市場と倫理】平等主義的分配と競争主義的分配
 講義担当：磯谷玲 教授
- 第5回 10月29日(土)14:00~16:00 場所：農学部2号館3105教室
 内容：【国家と社会】沿岸産油型エスノクラシー
 講義担当：松尾昌樹 准教授

受講料無料

会場：宇都宮大学(緑キャンパス) 授業当日の開場時間は13:30です。
 募集人員：50人(募集人員を超えた場合は、先着順とさせていただきます)
 申込方法：「公開授業参加希望」と明記し、住所・氏名・連絡先電話番号をご記入の上、「封書」または「電子メール」にてお申し込みください。
 封書でお申し込みの方は、返信用封筒、80円切手を同封してください。
 申込先：〒321-8505 宇都宮市峰町350
 宇都宮大学国際学部総務課 E-mail: koksomu@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp
 詳細はホームページをご覧ください。http://www.utsunomiya-u.ac.jp/
 問い合わせ先：宇都宮大学 TEL：028-649-5164

ミツバチと蜂蜜に関するフォーラム

「しもつけバイオクラスターフォーラム」
 日時：9月6日(火)14:00~17:30
 場所：農学部3101教室
 問い合わせ先：学術研究部研究協力・産学連携課
 TEL：028-649-5013



お知らせ 役職員の報酬・給与等の水準公表について
 国立大学法人等の役職員の報酬等及び職員の給与等の水準の公表方法等について(ガイドライン)に基づき、平成22年度の役職員の報酬・給与等の水準を公表しています。
 詳しくは本学ホームページをご覧ください。
 URL: http://www.utsunomiya-u.ac.jp/jyohoukoukai/index.html

オープンキャンパス2011

日時：7月24日(日)9:00開場 9:30開始
 問い合わせ先：宇都宮大学企画広報課 TEL：028-649-8649



県民の皆さまに授業公開 外交官から見た国際政治と日本の関係

国際学部では、開倫塾提供講座として国際学部専門科目「国際学特殊講義(国際政治・文明と日本)」を県民の皆さまに開放したいと考えています。講義を担当する神長善次国際学部客員教授は、栃木県出身の元外交官で、アジア、中近東の大使を歴任した方です。開倫塾のご厚意により、ぜひ県民の皆さまに、外交官から見た国際政治と日本の関係を聞いていただきたいと思います。企画いたしました。

- 日時：第1日 7月19日(火) (8:50~14:20、3コマ)
- 第2日 7月20日(水) (8:50~14:20、3コマ)
- 第3日 7月21日(木) (8:50~14:20、3コマ)
- 第4日 9月14日(水) (8:50~14:20、3コマ)
- 第5日 9月15日(木) (8:50~14:20、3コマ)
- 第6日 9月16日(金) (8:50~10:20、1コマ)

場所：宇都宮大学国際学部E棟3階 1351教室
 講義担当者：宇都宮大学国際学部 客員教授 神長善次氏 [元外交官]

受講料無料

定員：30名(超過した場合は、教室の関係でお断りすることになります)
 応募方法：下記宛に受講者の住所、氏名、連絡先電話番号、簡単な受講理由等を明記した「メモ」と「返信用切手」80円分を送付してください。
 申込先：〒321-8505 宇都宮市峰町350 宇都宮大学国際学部 久野専門職員宛
 応募期間：7月1日(金)~7月11日(月)
 ・参加の可否については、封書にて回答します。
 ・車でお越しになる場合は、正門の案内所にて入構許可の手続きをしてください。

「おいでよ!森のがっこうへ」大学の森をたんけんしよう!

林業機械操作体験・川遊び・自然観察・丸太切り・木工体験
 日時：7月27日(水)9:00~17:00
 場所：宇都宮大学農学部附属演習林
 対象者：小学生(保護者同伴可) 募集人数：約30名
 参加費：500円(教材費・保険料含む)
 申込方法：参加者の氏名 学校名 学年 連絡先(保護者住所、氏名、電話番号)を必ずご記入の上、下記締め切り日までに申し込みください。なお、1枚のハガキまたはFAXで1組5名以内まで受け付けいたします。募集人員を超えた場合は抽選とさせていただきます。
 電話での申し込みは受け付けません。
 申込先：宇都宮大学農学部附属演習林
 〒329-2441 塩谷郡塩谷町船生7556 FAX: 028-747-0366
 申込期間：6月1日(金)~7月1日(金)(必着)
 問い合わせ先：宇都宮大学農学部附属演習林
 TEL: 028-747-0057

宇大生から 受験生へアドバイス



宇大を選んだ理由

- 国際学部があったから。(国際学部4年) ※各学部、学部名称や学びたい分野を示した意見が多数ありました。
- 栃木県内で唯一の国立大学だから。(教育学部3年) ※国立大学ゆえの学費の安さを理由にした意見が多数ありました。
- 自分の成績に見合っていた。(互学部4年) ※センター試験の結果による、とある意見も多数ありました。
- 地元だから。(農学部3年) ※「自宅から通えるから」等、立地条件を示した意見が多数ありました。
- 餃子が好きだから。(互学部4年)
- 宇都宮市で日本で最大の自転車ロードレースが開催されるから。(農学部3年)
- 宇都宮がジャズの街だから。(国際学部4年)
- 盲導犬協会が栃木県にあったから。(国際学部4年)



宇大に入って良かったこと

- サークル活動が活発であること。(互学部4年)
- 良い仲間、先輩、後輩、先生方に恵まれたこと。(教育学部4年)
- 勉強もある環境が良い。景観が良い。(農学部3年)
- 視野が広がった。今まで経験できなかったこと、出会えなかったことなど、いろいろ学べた。(国際学部2年)
- ※「宇大に入って変わったこと」の回答としても多数ありました。
- さまざまな生き方や人生経験をした人と知り合いになれたこと。(農学部3年)
- のどかだけれど、都会と自然の割合が良い。(国際学部4年)
- 学生と教授の距離が近いので相談しやすい。(農学部4年)
- 心が大きくなった。(農学部3年)
- さまざまな生き方や人生経験をした人と知り合いになれたこと。(農学部3年)
- 授業が充実している。(国際学部2年)
- 学ぶ手段も色々知りました。(国際学部4年)

学生アンケート

宇大生は今!



宇大に入って変わったこと

- ★大学に入って、自分で何でもやらなくてはならなくなって、以前よりは自立できた。(国際学部4年)
- ★明るくなった。人見知りだったけど、いろいろな人と関わらううちに改善された!(教育学部3年)
- ★色々な考え方があると思えたこと。自分の意見だけでなく、人の意見も聞いて参考にすることが大切。(互学部4年)
- ★夢が明確になって「目標」になった。(教育学部2年)
- ★自分が学んだことが実際に現場で役立っているのを見ると、自覚的に学ぼうという気になります。(農学部3年)
- ★自分の興味のある勉強ができるので、より勉強に興味をもてるようになった。(互学部1年)
- ★今までの勉強は知識を得るだけだったが、大学に入り、理由を考える思考法が身に付いた。(国際学部4年)



その世なんでも!

- 自分のやりたいことを見つかけられると、大学は楽しいと思う。大学に入ってやりたいことを考えながら、勉強すると楽しんで大学受験ができると思う。(互学部4年)
- 力を入れすぎずがんばってください。(農学部3年)
- 大学にいろんな先生がいるが、いろんな研究をしているのかわかるのは重要だと思う。(国際学部3年)
- 息抜きも大切!でも、やる時はやる。遊ぶときは遊ぶ。(農学部3年)
- かせりがないように気を付けて!(国際学部2年)
- 勉強しすぎることはない。(互学部2年)
- 勉強は自分とのたたかいです。頑張ってください!(国際学部4年)
- 推薦を受けられたら受けた方がいいと思う。(国際学部3年)
- センターでしっかり点を取ろう。(教育学部3年)
- モチベーションが大切!行きたい大学を早く決めて、写真を貼っておこう!!(互学部1年)
- 図書館カリビングで勉強あるといい。(農学部3年)

UU now 第25号 企画・編集

企画広報課では、皆さまの声をお待ちしております。
 ご意見・ご要望などをお寄せください。
 【宛先】宇都宮大学 企画広報課
 〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350
 TEL 028-649-8649 FAX 028-649-5026
 URL: http://www.utsunomiya-u.ac.jp
 E-mail: plan@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp



編集協力 栃木文化社 ヒオス編集室

渡邊 直樹	発行責任者	太田 幸博	茂田 耕幸	菊田 浩二	川田 隆文	大田 和敏	清田 隆文	岡田 賢一	古村 賢一	木村 悠生	高木 悠生	藤島 悠生	野村 拓真	岩上 知可	木村 理沙	森田 真実	中村 真和	金井 和雅	宇都宮大学 企画・編集 第25号編集委員
企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当	企画・広報担当



■宇都宮大学 企画広報課

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350

TEL 028-649-8649 FAX 028-649-5026

URL : <http://www.utsunomiya-u.ac.jp>

E-mail : plan@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp